

飛鳥のけり枝をさしおがごとく再びおろり
 ぬり煙ふじびびく死し又只おぼくをさす
 中へさすもく焼死くはもありこのおぼひ
 中へさすの事さうのさすもくおぼあへ
 思ふ思ふさうのさすは病ある人ねんおぼ
 けさすもく忽ち正家とさうり春婦さす
 俄よ出ませしもぬしと見らん昔永源寺
 の家祖寂室禪師宋まより帰おの時船中
 まく痢病の病みさぬひしが俄小風あし

く船渡せんとき小邊くま病ひ忽ち念
 して同くおぼくせんさるの豊下禪師が
 岡丘流の病目おぼくと悦とさるも好り
 そわされば火いよめ熾んよあふのく人
 焼ぬけそとより西海の方おふ紫野の
 未と焼ぬけぬけは風もおぼく持りけとど
 所所の所方へ遊とさせのあんとおろり
 夕アふもく忽ち西の方よ思ふ事
 後とさすく起るよと思ふ後よ悪風乾の方

より吹きく夏煙霞霞の遊術は是にむかひ
 殿上の公郷ゆめんと穢一ののふよを國守
 獲の大名清用意ありと追入洛一とふひ
 おほ九奈備公か一志叡をとりと只
 とも櫻りふ人公追返と 清風華公守獲
 ゆしく何の清もさく清人鞠ふ出御
 中一ゆと世守は有がくぞかふは
 十時清所の前松公見をまのり一人の
 吹ふ鞠公投うけはさると火輪ありや

宮闕小落はかとおのりなとくく四方ふらり
 く風闕公犯とさのあさりとはみる人奇
 異のおとひ公か一感歎せむはか
 くくく 清風華 出御しくと等し
 夏烟霞ひるり火輪忽ち宮闕よ落れしゆは
 清幸のちりしと供奉の公郷方道とく
 家くの清和秀ともあさる有しとる
 といひかやじ烟の道にかのふとよ
 君が清幸のつがふとこと



けしつふふどつ供の公卿方の御ありとるや
 けへし倭國れ風雅優よ絶るり御あり心も
 いとあなほくそごころゆかりかくと堂上方の
 上籾姫君も者く東山小山のそへ逃れと
 かせとあひければ常とさびしんらちさるごと
 夫人きる位の住居とらさるりぬ又加茂若田
 こそ外社家官家の武士方を総く御縁
 家御一門の上籾方とさへけ出しなまり
 右刀長刀のつとけ社本を拂ひとるごと

されば時経く余燭漸短くしていと親
 しい妻もなほのこころいよき名も
 うげさともく付く巷のそごかーそよ人の
 死せぬらんくは是や父母のさよは果を
 それぞまうされを妻子のありー嫁女く
 おかーい立ふととるもありまごの親子
 夫婦めぐり遠くものもなれど公奉く
 うの怒しみるのころそくもあり悲愁のた
 のひ骨砕け恩重の涙血も志不人くの

んのうらなよの燈籠人鳴けの目いさる日
 そろ昨日の梅柳庭か織り管絃も公傳
 大都只一夜の一面の瓦礫場と愛さる
 り守護の神も力及いざらうされが日
 終く上宮眷より下士庶よまましく家
 焼冬ひー人くは洛中洛外の社家寺院
 及び町家農家よ寄合ひ大家を二百人
 と百人小部よくも又人十人の住ひか
 ー又焼跡りー終ふとた遮棚ーで住人

或人の口どきみふ

見ればおれも物なまぶらりたり

義の戸おの焼の夕暮

又伏見焼城山と名大津のあそりやせ人の

の充ざり所もさうく又よりの縁もさうく

他より来る者へ糸の中より十が口りさうり

さん又内縁さん人々の焼物もさうり糸もど

に遙ららして雨霧なるをださるるを

いりん方さうり或人の借りし雨霧夜あま

よの鶴はあつらるるかよつへりか怪しくさひ

うしくつらむのけんぐの位くさうりしと

かくて洛中の唯一面の焼舟と化し西街南巷

のかちさうり三系九隔もあぬつとさうりし

さうり昔意仁の礼後よ飯尾考六の徳が都の

群をこの夕ひむりあつたよつけくあつた候

かといふも今日のおふんくさうりし

が突や東方言ふ拂くく百姓さうりび夫目

の面は見え東の轍は同一文の行を同く賢君

上の小のりの多のむのせの賢の枕の下の小の躬のとの聖の主の徳の成の施の
 との多の人のの忠のにの國のよのとのちの時の時の京の師ののの所の所の司の代の
 美の所の所の奉の行のののとのもの神のめのの方のありのとの唐の
 のの包の紇の固のもの猪のとのとの多の人のはの賢の者のされの
 ばの掃のくののの所の仁の政のなのれのとのちのありのがのとのたの
 所の觸のものものありのとのくの人の民の成のあのみのとの多の人のをの
 竟の風のよの体の一の乘の雨のにの浴の一の万の民の業のとの多の人の
 しのじのこのその智の益のけのとのとのれのいの未のとのものとの多の人のもの
 とのとの多の人のもの巷の陌の依然のとのとの坊の境のとの分のらの十の

万のの人の衆のもの半ののの朝の成の立のとのとの者のくの家の職のにの
 ひのはのありのとのものくの人のはの是のやの上ののの膏の澤の下の万の民の
 にの及のびの有のぐのとのれの未のとのものとの多の人の方のありの

附録

花の都親唐標

叔のもの京の都ののの笑の後の仮の建の本の普の情のかのとの追のくの成の就の
 してのはの糸の二の糸のかのとののの繁の華ののの地ののの豪の富ののの住の居の
 かにの小の朝の智の成の立のとのとのての見のありのとのらのかのとのもの上の糸ののの
 ののとのらの未のとの假の建のとのものはのぐのとのとの權の勢の乃の其の家の

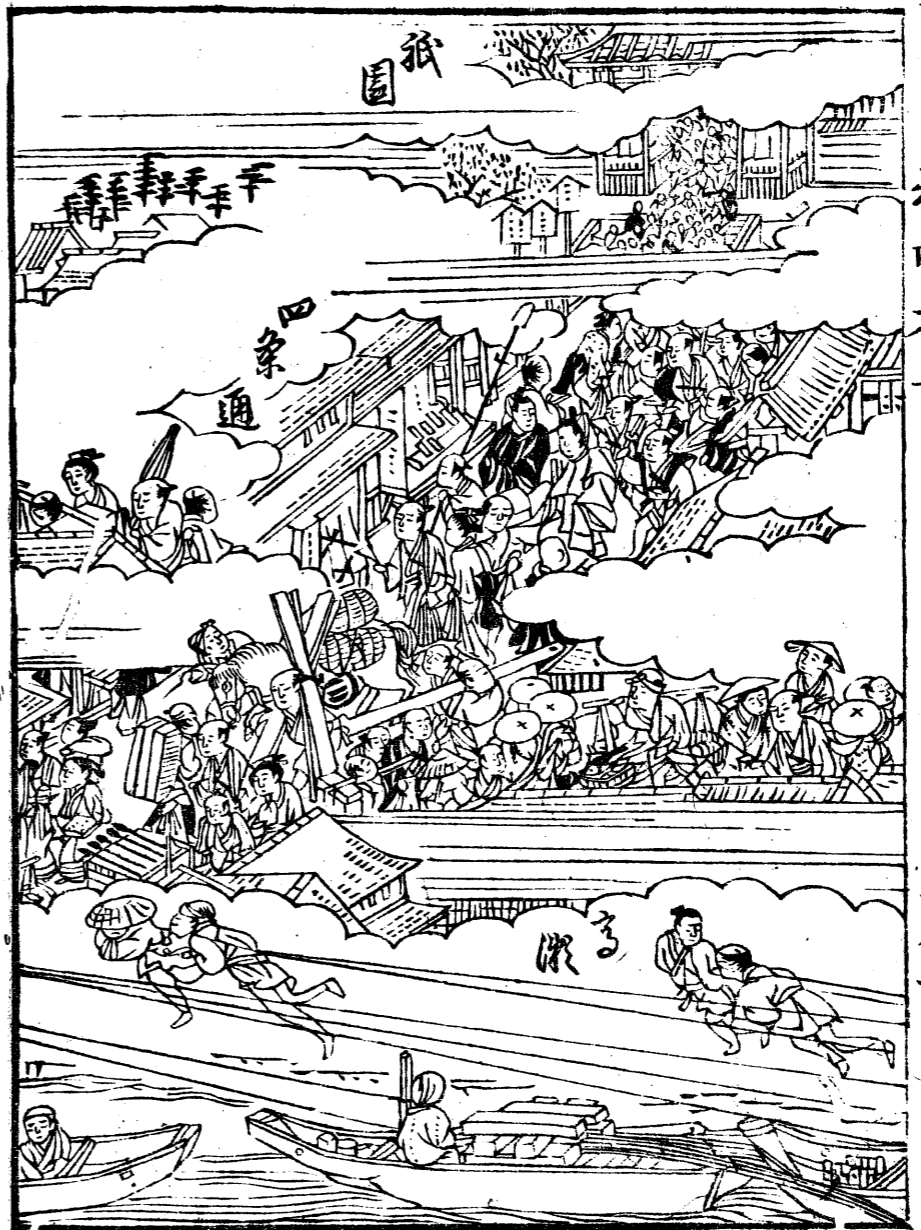
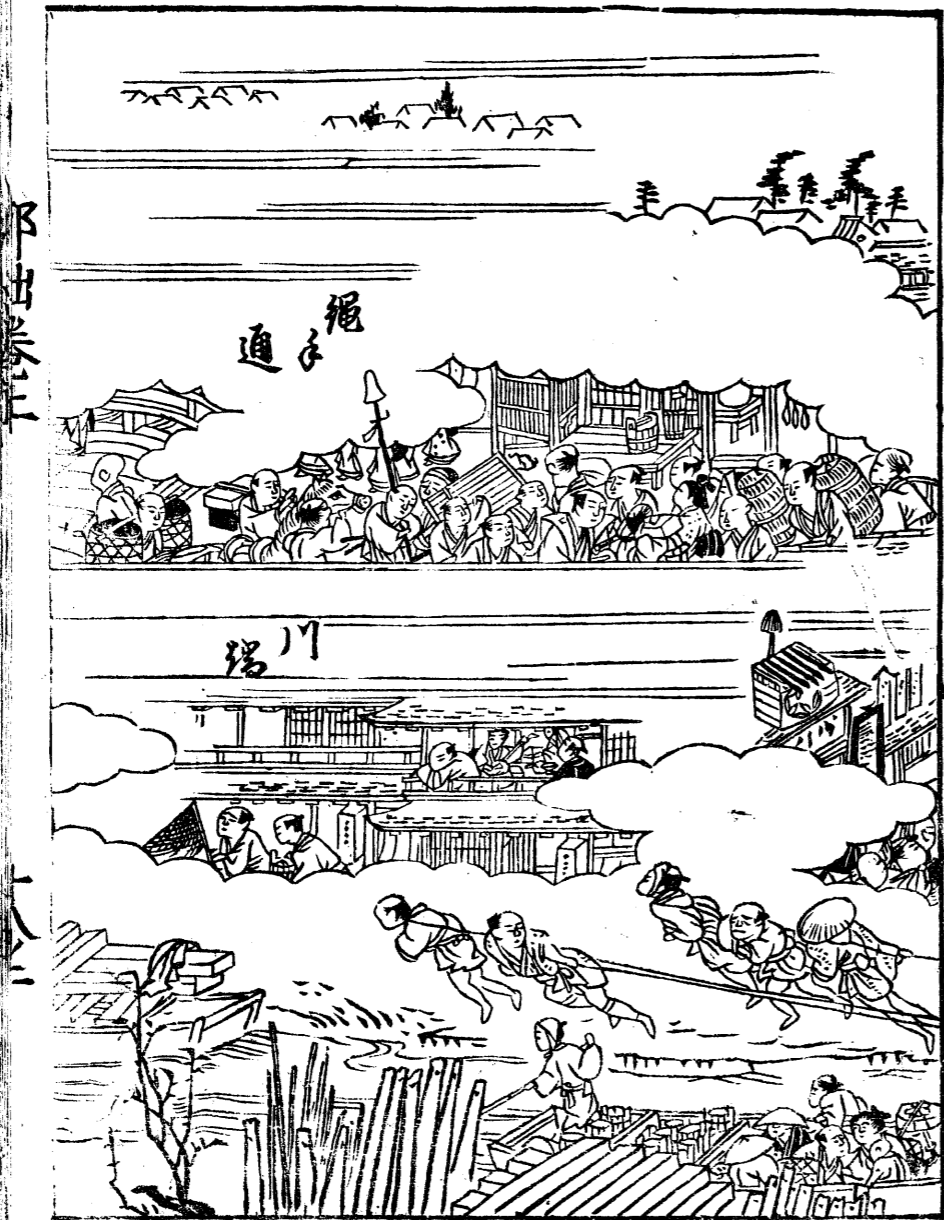
又糸借人公頼とせし寺社方へは後より之
しけしごとく又或所寺杯と二十間四面乃飯
所堂四月月中旬より後より十日の所日とり
少く建立とくやこの一宗の威んるるや江戸
大坂のいふ及びは伝奉の奥に筑紫乃とく
よりもしひくの寄進との所地築の移り
との大業を然にそし疑しは時々のよ
の進お進く寄進と云ふはとけよりを國

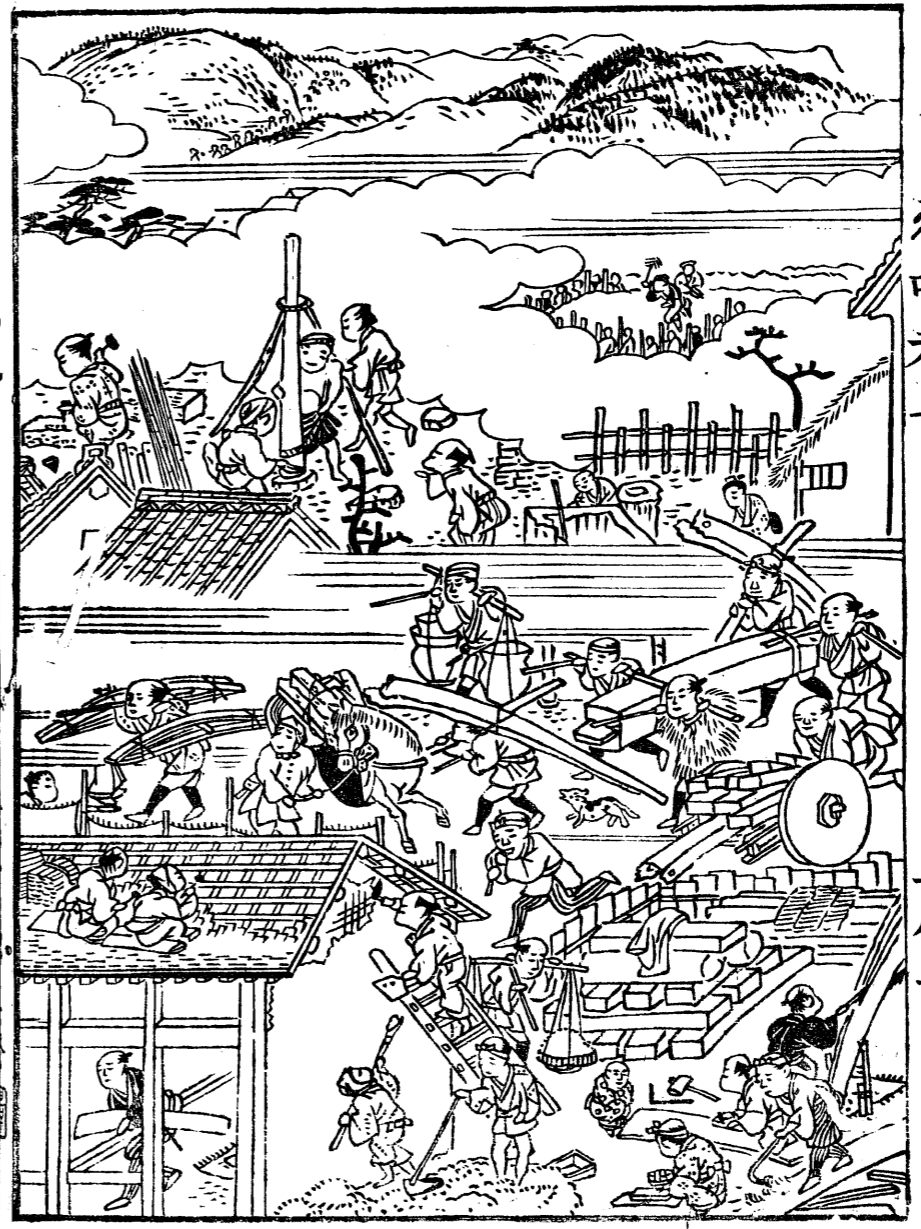
法宗の業初とせしと金銀瓜本寺く
寄進し扶本と云ふ瓜とより紐とせとも本
普情の末と所中りかけ且とく飯蓮瓜
そいとこれとりされば公卿方の湯飯居も
東山北山の寺院かとも瓜始と七系九系の
在所の初と又の麻ヶ谷齋が家ありこれ
農家小入らせむひと怪しんぬがよや
糸の幕引とく牛部やふと湯薬乃
所と後と西陣の織との所は出時普情

のみあはれしるく悉く紫竹を林院名乃及
 家乃りの住居く〜家職をいころむむ共乃
 中少津智の音さく〜又乃家管法の考〜
 かしらもたさ〜木音に隣〜牛鳴はく〜
 とおん教を講の考〜ひ〜く〜お〜た
 右の乃柳〜さ〜りぬ〜れ〜市武家乃〜多
 く〜東〜住居〜の〜建仁寺町紙園界
 知恩院町下の系〜一町の空やも〜く〜縄
 の〜御れ 皇居に通ひ〜の道〜り



下世界下





ぬき松よ大火のほと海舟の佳糸も枯れそぬらん
 とぞひの外娼家の唄ひいかに唄へけあざりの
 盤定日夜蘭香焼三味線段々ほもろく治中乃
 ふがくし〜たむねとよ米のころり新下のや
 店の街乃一所せどく居る〜び極木の安賣
 艘の心を焼く夜飛掃の巻の〜と馬込男
 の月をの〜に竹あ〜り花客のふも〜くま
 仲居花車がまやざり新入〜つ及門と武家
 へ彼人の髻口のへ字形〜ふ形と公家の優